

褥のうちに 誰ぞ入りて、  
しとねのうちに たぞいりて、

緩く沸き立つ 肌の中、  
ゆるくわきたつ はだのうち

浅き夢にて 麻衣  
あさきゆめにて あさごろも

夜一は、闇のうちに忍び入る気配を感じていた。目覚めばなは刺客かと、かすかに緊張もしたが、すぐにそうではないことに気が付く。立ち様すらゆらとして心もとないその影は、紛れもない、臣下のものではなかった。だが、常には鋭すぎ、強すぎるほどの霊圧が、なんと言おうことか、濡れ紙のごとく頼りないものとなっていた。

「そこで何をしておる」  
ゆっくりと話し掛ける。

はっと息を呑んだ碎蜂は、しばし口籠もった末に答えた。

「申し訳ありません。寝所を間違えました」

「何と」

間違えるはずが無い。直感はそう告げている。入って間もないのならともかく、入隊より何年も経つのだ。いぶかしむのが道理である。

「何か用でもあるのか」

「いえ、申し訳ありません」

ただただ済まなそうに碎蜂は言う。

その言に嘘は無いように見える。

とすれば。

「間違える程の事が、あったのじゃな」

かすかに息を呑む様子が闇の中を伝わった。

しかし、すぐにかき消える。

「お伝えするほどのことは、何も」

抑え切った声で答えた。

碎蜂もまた隠密である。想いを押し殺すことには長けている。

だからこそ夜一は気になった。一度でも動揺を露わにした。そのこと自体が『何か』を伝えているように思った。

「これは任務ではない。隠さねばならぬ理由など無い」

「ですから、何も、無いのです」

碎蜂は区切って、しつこいほどに、語調を強める。その様子が意固地になっているように見えた。

「何も、無いのです」

碎蜂は、小さく繰り返す。その言い様は、己を説き伏せるようにも聞こえる。

「そうか。何も、無かったか」

「はい」

夜一が再度問えば、うなだれた様が見えるような、力のない声でそう答える。

「儂にはそうは思えぬ。碎蜂、近う寄れ」

褥より上体のみ起き上がり、手招きする。見えないはずだ。それでも衣擦れと、ひたひたと板の間を踏む足音が柔らかく湿って聞こえる。

「碎蜂、手を」

「は」

伸ばされた指先は、ひどく冷えていた。暖めるように握った。その手の小ささを、その手のか細さを両手で包み込む。

「何も、か」

「……私には、何も」

碎蜂の手をたぐりよせれば、着物の袖が触れた。微かに普通の装束とは違う匂いが鼻をついた。  
線香の匂いだ。

「もう、何も、無いのです」

触れた着物の袖は、麻の荒い手触りがした。

あさごろも  
麻衣。それは喪服を意味する。

「……法要の、帰りか」

うなづく気配がする。

「蜂家の五男か。確かに、ちょうど三年になる」

答えぬまま、うなづく気配がする。

「あれには、気の毒なことをした」

何も答えぬ。答えぬまま、小さくかぶりを振る気配がする。

虫の音すら聞こえぬ。月影すら見えぬ。ただ重い闇夜が寝所の内を占めていた。

「兄の、力不足でした」

ようよう碎蜂が言った。

三年前、あの戦場には夜一はいなかった。だが敵の埋め火を踏んで死んだ蜂家の五男の顔は覚えている。  
手練れであった。五度の任務を生き延びたのだから。

だが、永遠に生き延びるほどの力は無かった。

「力の足りぬものは、死んでいくのでしょうか」

切々とした声に、夜一は面を上げた。碎蜂の顔はやはり見えぬ。

「私もいつか死ぬのでしょうか。兄たちのように」

「馬鹿を言うな」

「いつか死んで、お傍を離れなければならないのでしょうか」

涙も見えず、顔も見えず、ただ声の震えのみ、耳を打つ。

「夜一様のために死ぬのは、怖くない。けれど」

ひくりと喉の奥が高く鳴った。

「貴女と離れるのが辛いのです」

つぶやいたその口を、夜一は無理に手でふさいだ。

静かになった。

己の心音が胸のうちをふさぐ以外は。

「馬鹿を、言うな」

もう一度言った。

まるで震えるように、うなずくのが手から伝わってくる。

その拍子に降りた暖かなしづくで、夜一の指先が濡れた。

はじめから泣いていたのだ。ここに来る前からずっと、声を殺して泣いていたのだ。

そっと、口をふさいでいたその腕を碎蜂の方からはずした。

そしてただ、鳥が餌をついばむように、短くくちづけた。

互いに、何も言わなかった。

どんな顔をしているのかも見えない。

けれど、闇の向こうから碎蜂の熱が伝わってくるような気がした。

指先はとうに触れていた。今更、突き放すわけにもゆかぬ。

のびてきた腕にこもった力を和らげるように、今度は夜一からそっとくちづけた。腕は、息絶えるように緩んだ。

覆い被さるように、碎蜂は倒れ込んだ。小さな細い身体を夜一の胸元に預けた。肩は震えていた。寝間着の襟元にじんわりと染み通る暖かさを夜一は感じた。

しがみつくように、碎蜂は腕を絡め、夜一へ口づけを降らせた。吸い付いて離れぬように、強く強く、首筋へ痕をつけた。

「っ……」

夜一は微かに吐息を漏らした。耳の奥にぞくりとするものを感じた。

碎蜂は気付かない。ただ一心に夜一の身体に服の上から触れている。抱きしめ、頭をすり寄せて、懸命に己の記憶の中へ刻み込もうとしている。

くしゃりと、夜一は彼女の髪を撫ぜた。柔らかい。暖かい。その指先は凍えるほど冷たいのに。

「碎蜂」

名を呼んだ。夜一の顔が上がるのが分かった。すぐそばに、頬と頬が触れるほどの近くにすり寄るのが分かった。

「もっと近くに、寄れ」

「は」

碎蜂は戸惑うように、顔を寄せた。吐息が鼻先をくすぐる。ひどく熱い。

「そうではない」

夜一は碎蜂の手を握り、己の帯に伸ばした。

小さく彼女の喉が鳴る音が聞こえる。手は、ためらいながらも、それをほどいた。

静かな衣擦れが闇を埋めていく。その様はひどく早急で、夜一はひどく可笑しく、いとしく思った。

碎蜂の手はなめらかに肌の上を滑っていく。何かを恐れるように、胸の上の突起にも、下腹部にも触れない。ただ繊細な指先が、首筋を、鎖骨を、肩を、腕を、脇を、くびれを、腿を、膝を、おずおずと触れていくだけだ。その合間合間に、ついばむような浅い口づけが繰り返される。柔らかで湿った口づけの感触と、時折素肌に触れる衣のざらついた肌触りがひどく落ち着かなかった。

「おぬしも、」

夜一はつぶやいて、相手の帯に触れた。碎蜂は初めて気が付いたかのように、あ、と小さく声を上げた。ぐっと体温が上がっていくのが伝わってくる。

口の中で、すみません、か、もうしわけありません、か、そんな言葉をつぶやいて、上体を起こした碎蜂は帯をほどきにかかった。

それを待っている間、夜一の肌が冷えていく。ますます、落ち着かぬ心地がした。

「儂を、飽きさせるな」

穏やかな声で叱る。凍りつくようにぴたりと固まった碎蜂に、夜一はかすかに笑んだ。手を伸ばして、くい、とその唇をなぞる。つややかで荒れたところなどどこにもない。あれほど声を殺して泣いていたのに。

「早くしろ。儂の気は長うないぞ」

「は、はい」

慌てている。そのせいでますます帯が絡まる。きつく結ばれてしまって、ほどけない。

「仕様のない」

笑いながら言うと、碎蜂の唇の端がかすかに下がるのが分かった。碎蜂には見えないのだ。

碎蜂の手を、自分の唇に導く。互いに手と手で、唇をなぞりあう。

彼女の息が少しずつ上がっていくのが分かる。こころみに、その中指をかすかに<sup>は</sup>噛んだ。

「っ……！」

驚くほどあからさまに、碎蜂は身じろきした。自然と笑いが漏れる。

唇をかすかにとがらせるのが分かる。それをなだめるように、優しく撫でた。

そうしながらも、少しずつ中指を吸い付ける。甘く甘く噛んで、舌を絡ませる。柔らかな口腔で碎蜂の指先を泳がせる。指の腹をくすぐるように、舌尖と唇を擦りつける。

「あ……」

吐きだした碎蜂の熱い吐息が、夜一の指先に触れる。その吐息はひどく濡れきっている。

頃合いか。

頭の中で、何かが囁く。独りでの夜一の手が碎蜂の着物を脱がせていた。いとも容易かった。

崩れ落ちるようにまた、碎蜂が覆い被さってきた。胸の先が直に触れる。小さい。そして熱い。

わずかに強弱をつけて指を噛むだけで、碎蜂はびくりと身体を震わせている。舌の下へ奥へ、吸い込む。硬い指先を柔らかな粘膜で包み込む。そのたびに碎蜂の腰が、震える。茂みが触れあう。

軽いけれど、それでも人間の確かな重みを感じる。

彼女は生きている。生きて、すぐそばにいる。

そんなことに安堵する自分がある。

濡れた指先を解放する。碎蜂はすぐに、その指先で夜一の局部へ触れた。もうためらうことはない。左手で胸の突起を、右手で花卉を開く。貫く。

「っ、ふっ……」

初めて、夜一が息を上げた。少し、急すぎた。

けれど、言わない。言いたくない。その必死さがたまらなくいとおしかった。

「は、っあ」

互いの息継ぎの音に混じって、くちゅくちゅと水音がする。自分の中に碎蜂の指が入っていくのを感じる。身体全体が熔けそうに熱い。

熱をかき立てるように、手と一緒に碎蜂の腰までが動く。お互いがぶつかり合う。

「んっ、あっ……」

夜一よりも激しく、声を出して、碎蜂が動く。唇が唇に吸い付く。舌ごと吸って、つなぎとめられる。

「あっ、ふ、あっ、つく、や……」

まるで自分自身が突かれているかのような高い声を上げて、碎蜂は夜一の奥へ指を突き立てた。同時にぎゅっと夜一の内側は縮こまって碎蜂の指を締め付けていた。腕を絡めて、抱きしめた。しがみついていないと、自分が離れていってしまいそうな気がした。

「っ……！」

ただ、吐息だけで夜一は果てた。

静かな夜が戻った。

碎蜂の吐息ばかりはまだ荒い。

何も言わずに、ただ腕をからめた。

心音、体温、重み、吐息。互いの全てを感じているように思った。

月もなく、明かりもないまま、ただお互いだけがそばにいた。

翌朝、夜一が目を覚ましたとき、既に碎蜂はそばには居なかった。かすかに残り香がしたようにも思うが、定かではない。

ゆるゆると首を振って夜一は起きあがった。流石に少し混乱していた。

朝日は部屋の隙間から白く差し込んできていた。上掛けの下で、着た覚えのない寝間着がわずかにはだけていた。

とても現実のように思えなかった。二人ともずっと濃い闇の中にいて、顔を確認したわけではない。猫の目を持った自分ですら、見通せないほどの闇だった。夢幻であったとて不思議はない。

けれど、抱きしめた身体も声も皆、碎蜂そのままではなかったか。そのことには確信があった。

と、足音が軽やかに廊下に響き、部屋の前で止まった。

「碎蜂か」

障子が開くより先に、声を掛けた。ぴたり、と動きが止まる。

「朝飯は此处で食べる。申し訳ないが、こちらへ運んではくれぬか」

「は」

かしこまった声で、彼女は言った。

「二人分、な」

「は、はいっ！」

付け足した夜一の言葉に、碎蜂の声が高くなった。

その様子に、あれが夢ではなかったことを確信した。

夜一は一人、小さく笑んだ。